

POSEIDON WAR

ポセイドン ウォー

竹島将



DOREIDON WAR

ポセイドン ウォー
竹島 将



集英社

ポセイドンウォー 上

一九八九年八月二十五日 第一刷発行

著 者 竹島 将

発行者 若菜 正

発行所 株式会社集英社

〒100 東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

出版部 (〇三) 二三〇一六—一〇〇

電話 販売部 (〇三) 二三〇一六—三九三

製作課 (〇三) 二三〇一六—〇八〇

印刷所 中央精版印刷株式会社

検印廃止

乱丁・落丁本が万一ございましたら小社製作課宛にお送りください。送料は小社負担でお取り替えます。本書の一部あるいは全部を無断で複写複製することは、法律で認められた場合を除き、著作権の侵害となります。

© 1989 S. TAKESHIMA, Printed in Japan

ISBN4—08—775130—9 C0093

ポセイドンウォー 上

主な登場人物

郷本哲朗 昭和火災海上保険産業開発室長

平岡慶孝 通産省貿易局安全保障貿易管理室長

明石 洋 平岡の部下。パリ駐在日本大使館コム担当アタッシェ

ローレンス・パール 米国防総省国際安全保障政策担当次官補

バーバラ・ミコノフ パールの部下

ダニエル・ハットフィールド 同

ランディ・ボシュイッツ 同

ハワード・ウィンクラー 同

テッド・ゴールドメイヤー CIA作戦本部長補佐。パールの情報源

ラルフ・クレイン 米国務省国務長官

アルビン・コナーズ クレインの部下

ポール・セイヤー 同

ケン・ヘラー 同

ジェーン・ハマースタイン 同

セオドア・エクソン 米国防総省国防長官

ジョン・ニクルズ ポール&マッキンレー国際事業部担当専務

エドガー・マッキンレー 同社社長

エドワード・J・ドネリー 同社副社長

アルフレッド・コフリン 同社国際事業部長

ジョアンナ・フィールズ 潜水ティーム・ジュリエットのメンバー

クリスチーナ・ミレス ソ連レジスタンス・グループのメンバー

ソ連ゴルバチョフ書記長の訪米が正式に発表された。

時期は三カ月後。ゴルバチョフはワシントンで新たな通常兵力削減提案を発表するであろうという観測が、西側の情報筋やマス・メディアから流された。

それもこれまでゴルバチョフが提案したものの中でも、最も衝撃的なものになるだろうと言われ、それを発表する場所にワシントンを選んだことは、ゴルバチョフ書記長の強力なイニシアチブを全世界へ決定的な形で見せるにはまさに相応しい舞台だと言えた。

新たな、しかもドラスティックとも言える通常兵力削減提案を持つて訪米しようとしているゴルバチョフは何代ものアメリカ大統領を上回る、久々にソ連に登場した歴史的な指導者としてその地位を固めつつあった。

そして――

――いつ帰つてくれるの？――

――そうだな。確実なところを言えば、三日後には必ず帰国できると思うよ――

――本当に三日後？ 本当に？――

――信じられないのか？――

――いえ……そういうわけじゃないけど――

昭和火災海上保険の産業開発室長、郷本哲朗は、どこか当惑に満ちた妻、頼子の声を聞きながら、妻がそう念を押すのも当然だと思えた。

今までずいぶん帰国日が順送りされてきていた。もちろんそれは郷本のプライベートルな事情ではない。会社側の業務命令によるものだ。

頼子は繰り返した。

――本当に三日後ね？――

――ああ……――

郷本は断言しようとしながらも、自分の言葉にさえない微かな自信のなさが滲むのが判った。

――それじゃ。待っているわ。三日後に――

「いつお帰りになるのですか？」

郷本は背後からかけられた声に思わず驚いたように振

り返った。

「いつ？」

郷本は反射的にその質問を繰り返す。

彼の前には不精髭を生やした小太りの丸山が、郷本の反応に怪訝な顔で立っている。

「ええ。いつ、郷本さんがお帰りになるのか、お聞きしたいと思ひまして」

「三日後だよ。三日後の夜には成田に到着しているはずだ」

丸山は僅かな照れ笑いを浮かべた。

「じゃ、一つお願いできますか？」

郷本は丸山の言葉が判っているかのように、ほのかに笑った。

「手紙かい？ 日本へ持っていく」

「ははは」

丸山は頭をかきながら、再び照れ笑いを発した。

「構わないよ」

「すみません。では、あとで持って上がります」

丸山はペコンと頭を下げると、小走りにブリッジへ向かった。

郷本が帰国するのが知れてから、彼で何人目だろうか？ いずれにしろ、日本へ送る手紙は彼らの一時の安らぎになることだけは確かだ。

七月三十日。

郷本哲朗はアメリカ西海岸、サンディエゴの西五キロの海上にいた。

郷本は昭和火災海上保険始まって以来の巨大なプロジェクトを率いていた。

プロジェクト総費用五兆千七百九十五億円。

プロジェクト・ネーム『マリン・ユートピア計画』。

保険業界は今、まったく新しい時代へ突入していた。

それは保険業以外への進出だ。それも生半可なものではない。言わば官庁が中心となる国家的なプロジェクトへの進出だった。

元来、日本では日本興業銀行が昭和四十八年から産業調査部を設立し、国家的プロジェクトなどへ本格的な進出を始め、昭和五十年代までは独占していた。ところが日本経済が高度成長し、同時に各種金融業界が国家的プロジェクトへの参入を開始した。

まず昭和五十年代に第一勧業、三菱、住友、富士、三和から三菱信託、住友信託等々。昭和六十年代に入ってから保険業界が参入し、生保関係で日本生命、第一生命、住友生命、明治生命、朝日生命、さらに損保関係で東京海上火災、安田火災等々、そして郷本の所属する昭和火災海上保険が加わった。

昭和火災海上保険自体の損保業としての成績は業界三

位だったが、郷本は自社のバックにある三友財閥グループの力と、自らの旺盛なる野心に裏打ちされた行動力で、産業開発室だけの業績を言えば、他を圧倒的に引き離して業界トップの座へ押しあげた。

郷本の指揮する産業開発室は各官公庁や国会議員、市町村等々に密接なパイプラインを持ち、様々なニーズに沿ったプランを立案する。そして、そのプランの実現へ向けて民間企業や民間の研究者を引っ張り込む。プランは総て巨大であり、巨大であるがゆえにそこから派生する保険、金融、不動産事業等々の金額も膨大なものになり、最終的にそれを昭和火災が受け持つ。

産業開発室には開発一課から五課まであり、課によって担当する業種は異なる。

たとえばある大都市から新たな地域開発プロジェクトを動かしたいという相談を受ける。そのニーズに沿ったアイデアを各界のエキスパートにオーダーして立案する。それらを元に研究会や基本になる事業団を設立する。その中には国会議員、官公庁関係者、金融関係業、各公団、そしてときには各主要産業の代表者や広告代理店までが参加する。

郷本が現在手がけているものだけを見ても、東京副都心開発、大深度地下都市の建設、日本全国を光ファイバーなどの高度情報システムでつなげ日本全土をインテリ

ジェント国家にしてみようというものの、日本西部の温暖な地域に長期滞在型の巨大なリゾート地を作り上げようとするもの、みなとみらい21計画、オーストラリアでの多機能都市建設計画、関東総合レジャー・ランド構想、ふるさと創生プロジェクト、東京湾横断道路等々。産業開発室が関係しているプロジェクトだけで七十二。その内郷本が実質的にリーダーシップを取っているものが三十四あった。

推進しているプラン、プロジェクトには未来の日本へのあらゆる側面からの提言がその基本にある。つまり、郷本の産業開発室がある意味では未来の日本を創造し、動かしていると言っても過言ではなかった。

そして、今、彼は産業開発室が手がけた最大のプロジェクトであるマリン・ユートピア計画を指揮していた。

かつて各界の反対にあい、廃案の憂き目にあった『シルバー・コロンビア計画』のスケール・アップ版だ。官庁としては通産省が中心となり進めているもので、日本人へ『生活する』という面も含めた半永久的リゾート・ライフを提供する計画だ。『シルバー・コロンビア計画』のように老人だけでなく、その層は老若男女の多岐に渡る。リゾート・ライフを作り上げる最初の地域は北米大陸沿岸。日米の企業体が共同で北米大陸沿岸各地にマリン・リゾートを建設する。そこに日本から人間を招き入

れるのだが、その招き方も日本から、アメリカのそれぞれの国際空港を経由せずに、マリン・リゾート指定地域に空港をも建設して、そのまま直行させてしまおうというものだ。

リゾート施設だけでなく、ホテル、マーケットやデパート、さらに医療施設等々、言わばセカンド・ハウスのに使う人々のために生活空間も提供するという巨大なものがこのマリン・ユートピア計画だった。

郷本はポケットからセブンスターを取り出した。

足元から微かなうねりが感じられる。

彼は今、そのマリン・ユートピア計画の中のリゾート施設の一環である、トレジャー・ハンティング計画を指揮する場にいた。

シー・ウルフと呼ばれる双胴タイプの海中作業船だった。

全長六十二メートル。幅三十メートル。上甲板までの高さは十一メートル。最も高い所までは約二十八メートル。総トン数は三千二百八十トン。航続距離は六千五百マイル(約一万五千キロ)。巡航速度は十四ノット。最大速度は十八ノット。

二つの船を横に並べ、その間に甲板を乗せたような双胴船であり、海中作業の基地となる水中エレベーターを搭載していた。これに二ティーム十四人が乗れ、例えば

深度が三百メートル程度になると、その水中エレベーターに併設された船上減圧タンクで体を慣れさせてから、水中エレベーターごと船体中央部に設けられた開口部から潜水していく。

その他、自動船位保持装置やルート保持機能等々最新鋭機器を装備していた。

そのシー・ウルフの右舷ウイングで手すりに背中をあずけ、セブンスターに火をつけた。

マリン・ユートピア計画が計画段階から施行段階に移ってからです。すでに半年が経過していた。まず地上施設の建設に入り、次いで今の海上、海中施設の建設に入っている。

もともと郷本の仕事はプランニングと計画推進指揮であり、指揮自体はアメリカにいたくとも日本にいればすむことでもある。しかし、それはあくまで通常の仕事にのみ適用される。今回のような、成功すれば昭和火災の名前が全世界的に轟くプロジェクトに関しては、どうしてもその仕事の領域を拡大せざるをえず、ましてこのプロジェクトの成功はそのまま郷本自身の取締役昇進への大きなファクターになる。そのためにも失敗は絶対に許されなかった。

郷本は生まれながらにして自信家だった。正月の大学駅伝に出場したために慶応大学経済学部に入學したが、

その本心は東大へ進学を希望していた。東大卒というキャリアを持つことが、ビジネス社会での成功の一步だと考えていたからだ。同時に高校時代は陸上部に籍を置き、長距離ランナーとしては東京都でトップの力を持っていた。

結局、郷本は慶応へ通学しながら、目標通りに箱根駅伝で活躍したものの、駿台予備校へ通い、翌年東大の経済学部に入學した。その後、たまたま先輩がいるからという理由だけで、昭和火災に入社した。彼にとってはそれが例えば都市銀行でも、証券会社でもよかったのだ。

自分に最も合っているのは金融関係の仕事であると、理由もなく考えていたからだ。七年ほどは幾つかの部署を動きながら、東大経済学部を卒業したキャリアとしてエリート・コースを走っていた。だが、流通業としてはナンバー1の地位を占めるSEASONとアメリカの中堅保険会社カリフォルニア・フランデンシャルのジョイント・ベンチャーへ会社から出向したとき、上司とぶつかった。もつともその上司はフランデンシャルから出向してきている人間だったが、いずれにしろ彼は自説を曲げず、厳しい立場に立たされた。

彼は仕事の進行上の支障が出るという理由から、そのジョイント・ベンチャーから外され、本社に戻った。しかし、計画を完遂せずに外されたということが一つの汚

点としてキャリアに残った。

その後、郷本は宮崎支店に異動を命じられた。副支店長という立場だったが、栄転というには程遠い場所だった。

だが、彼は宮崎支店の業績を一気に押し上げた。

二年後に神戸支店へ異動し、続いて本社へ戻ってきた。郷本哲朗にとってのその四年間は無駄ではなく、逆に彼の不屈さを養うには充分すぎるものだった。

本社の産業開発室の室長補佐を三年経験した後、室長に就任した。

その後はまさに破竹の勢いで産業開発室を業界トップの座に持っていた。

腕時計を見た。

「一カ月……か」

アメリカ各地を転々としながら、それだけの時間が経過していた。

紫煙をゆっくりと吐き出す。

煙とともに体内に淀んでいる疲労も吐き出されていくようだった。

体を翻した。

カリフォルニアの明るい陽ざしの下にアメリカ西海岸がゆったりと揺れている。

そう言えば郷本はアメリカに来て以来、一度も泳いで

いないことに気づいた。

もちろん宿泊するホテルにはプールがついている。だが、そんなことをする時間がなかったのだ。

いや、それは正確ではない。郷本は決して太ってはいない。四十四歳という年齢の割りには引き締まっている方だ。学生時代は長距離ランナーとして鍛え、卒業後もできるかぎり毎朝、走っているのだ。それはアメリカにやってきた今回も同様だ。

「走る時間は作ったが、泳がなかった……か」
自分らしいなと苦笑した。

根っから走ることが好きなのだ。それは人生においても。

煙草を大きく吸うと、海へ向かつて弾いた。

そのときだ。

「郷本さん」

振り返った。

丸山が立っている。

「どうしたんだ？」

郷本は丸山の当惑した顔のせい、反射的にそう訊ねた。もしかすると先程の手紙を持ってきたのかもしれないのに。

丸山が言った。

「ちょっと見ていただきたいものがあるんですが」

それはできそこないのカラーTV映像のようだった。不安定な映像だった。

映像は確実に映し出されているものの、色が物体の輪郭以上に滲んでいた。

もちろん映っている物が何なのかということは、取り立てて説明を受けることもなく判断できたが。

沈没船の右舷だ。

それは割りと大型の漁船のようであり、海底に船底から奇麗に接地していた。

「これが？」

郷本の声がシー・ウルフの総合指揮室に響いた。

そこはブリッジのすぐ後ろ、航海船橋甲板にある海中作業全般を指揮するコントロール・ルームだった。

丸山がコンソールの中にセットされたCRT(TVモニター)を指差した。

「これです」

示された場所には穴が開いていた。

「穴だが。それがどうしたというんだ」

郷本は怪訝そうに言う。

「よく見てください。この穴はまるで切断されたように奇麗に開けられています」

郷本は眼を細めた。

確かにその断面は鋭利な刃物で切られたように鋭く、しかも総て同一方向へ折り曲げられていた。

「この船は我々のコード・ナンバーでいくとジュリエット7（セブン）です。ティーム・ジュリエットが目標搜索指定作業中に発見しました」

郷本はCRTに顔を近づけて、改めて見た。

言う通り船体を切断されて穴が開けられたように見える。

「チーフはどう思うね？」

郷本は振り返った。

総合指揮室は四方の壁際にコンピュータを内蔵したコンソールが並べられており、中央にはXYプロッターと呼ばれる、各作業班の位置を海図に示すことのできる装置が置かれていた。

典型的な海の男と呼べる、大柄で髭面のアメリカ人がそのプロッターの横に置いた椅子に座り、腕を組んでいた。

「そうだな。実物を拝んでみないと正確なところは判らないが、沈没した船体の右舷を何らかの切断器を使って切り開き、中の物を取り出したところかな」

「中の物？ どういうことだ。グローデイン」

水中作業班チーフ、髭面の男、ガス・グローデインは丸山を見て、うなずいた。

「ここを見てください」

丸山が画面を指差した。

ほぼ楕円形に切り取られた切断面の中に床が見えた。そこに何らかの物体が置かれていた跡のようなものが見えるのだ。

「はっきりとは見えないな」

丸山がCRT横の一つのスイッチを押した。すると、画面は切断された開口部に近づいていく。

強い光量のライトが水中に微かに湧き上がる砂とゴミの渦を際立たせる。

カメラが完全に船内に入った。

そこは船倉だ。

しかも、グローデインの言葉通り、床には埃と砂で引かれた境界線で、明らかに四角い物体が置かれていたことを示す形跡を見せていた。

「そこで止めてくれ」

グローデインはそう言うのと立ち上がり、コンソールに歩み寄った。

「大きさ十メートル立方だ。それに」

グローデインが画面の隅を右人差し指で軽く叩いた。指先には彼の歴史を物語るかのように深々とした傷痕が刻まれている。

「こいつだ」

それはフックのようだった。そのフックからワイヤーが伸びている。

「こども」

グローデインは画面の逆側の隅を示す。

「そして、こどもだ」

画面中央部の奥。それらにはやはりワイヤーが引っかけられたフックがあった。

「これらでここに置かれていた物体を固定していたと見るのが妥当だろうな」

郷本は両手を腰に置くと、小さく吐息をつき、室内を見回した。

各コンソールには職員がそれぞれについており、作業の進行状況をモニターしている。

このシー・ウルフは少なくとも西海岸一帯で行われている総ての作業の中心基地になっていた。作業はスキューバ・ダイビングのレジャーに使用する沈没船の発見とそれに伴う改造だ。まずロイズや様々な船舶関係から得たデータを元におおよその船の特定をする。そして、そこへそれぞれのチームが散らばり、スキューバ・ダイバーを潜らせ、場所や深度、船の状況の確認をする。それらがリゾート施設として使えることがはっきりした段階で、船名から所有船舶会社を捜し出し、所有権を得るかないしは貸与してもらう。それらの作業を太平洋沿

岸と大西洋沿岸全域で行い、すでに作業としては三十パーセントを終えており、作業班の人数はそれぞれ異なるが、一チーム七人から二十人で計二十チームが動いていた。

「つまりだ。この船の沈没後、何者かが船体を切り裂き、そこに固定してあった物体を運び出したというのか？」

郷本は英語でそう告げると、丸山を見た。

丸山は郷本の眼差しに答えず、グローデインを見る。

郷本もその視線を追い、彼を見た。

グローデインは白髪混じりの髭を徹かにゆがめると、肩をすくめた。

「そういうことだよ」

「何を運び出したと思うね？」

「さあな？ 麻薬か？ 武器か？ とにかくこの船にはタッチしない方がいい。海には俺達の判らんことが今でも多い。つまらんことに首を突っ込むと神さんがヒステリーを起こす」

郷本はその言葉を無視して、自分にとっては左サイドのコンソールを見た。

「レビン。ジュリエット地区で発見された理想的な目標は他にあるか？」

コンソールの中でも一際大きなものに座っていた背の高い赤毛の男が郷本の方を振り返った。

「ジュリエット地区ですか？」

搜索地域はそれぞれに名前がついており、それはまた、そこを担当するチームの名前にもなっている。

「そうだ。このジュリエット7以外にだ」

「ちょっと待って下さい」

レビンはいボードを素早く打った。

彼の前のCRTに文字が浮かび上がっていく。

「報告されている内ではジュリエット7が最適です。深度は十二メートル。海底の硬度は九十。固いですね。船体破壊度は四十。傾斜角は……ほう」

「どうした？」

「僅かに十四度。こいつはビギナーには持つてこいの遊び場になりますよ」

郷本は再びグローデインを見た。

「君は」

グローデインは郷本の次の言葉を取った。

「無論だ。うさんくさいものには手は出したくないね」

「だが、麻薬や武器だろうか？ 船を海底に沈めて、そこから引き出すような手の込んだことをするだろうか？」

グローデインは天を見つめ、首を左右に振った。

「判らんね。連中のやることは判らんよ」

「連中って？」

丸山は口を挟んだ。

「つまり、どこの誰かは知らんが、連中さ」

郷本は何かがつまみ掛かっているのか、CRTを見つめている。

カメラの前を小さな魚の群れがゆったりと泳いでいく。ポケットからセブンスターを取り出し、口にぐわえた。

グローデインはその郷本の横から、彼の思考を遮ろうとするかのように口を出す。

「俺はとにかくこいつには……」

「ガス」

郷本はグローデインを呼んだ。すると、グローデインはなぜか表情をしかめた。

「あんたにそう呼ばれたときにはろくなことがないんだぜ」

郷本は苦笑しながらも、続けた。

「いいか。もしだ。麻薬や武器の密輸だとするならば、こんな形で船体は切り裂かない。船はまるで浮かんでいるような状態で海底に着底しているんだ。入れた所から再び出すさ。つまりだ。こいつを切り裂いた人間は置いてあるものを船倉の蓋から出さずに、形を壊さず、まるごと出したかったんだ」

「悪いが俺は素人探偵につきあうほど暇人じゃない」

グローデインは郷本から離れようとする。

「そして、このジュリエット7は理想的な状態にある。我々の計画の一つとして」

「ボス。理想的な状態にあるのはこれだけじゃない。アルファ地区にも、チャーリー地区にも、その他にもいろいろある。これだけじゃ」

レビンが口を挟んだ。

「いえ、これほどのものは今のところ、こいつだけです」

グローデインが怒ったような表情でレビンを見た。

レビンは舌を小さく出し、慌ててコンソールへ向かう。

郷本は結論を出すように言った。

「とにかくティーム・ジュリエットと会おう。丸山君。

すぐにヘリコプターの用意をしてくれ。移動する」

「はい」

丸山はそう返事をする、一つのコンソールの方へ足早に歩いていく。

「レビン。このジュリエット7の船会社を調べてくれ」

「了解」

レビンは茶化したように右手で敬礼の真似をして見せた。

「ボス。俺は反対だ」

「海の神様が怒るっていうのか？」

「そうだ」

ガス・グローデインは、冗談まじりに言った郷本が驚くばかりに真剣に答えた。

「俺は長年の経験で判っている。海じゃ、不安な思いにさせるものには手を出すな。こいつは鉄則だ。それも鉄則のしよっぱなに出てくるやつだ。俺はこいつで何度も命を助けられた」

「ガス。大丈夫だ。ティーム・ジュリエットの話聞いて、それでも君の不安が取れなければ止めよう。それでどうだ？」

ガス・グローデインはまだ納得できないかのように、腕を組み、大きくうなった。

郷本はその姿に苦笑し、言った。

「何もないさ。海の神はこんな些細なことにこだわりのない」

「だが、ヒステリー性さ。たとえばすぐに海を荒らす」

「女か？ 神様は？」

グローデインは釈然としない顔でうなずいた。

郷本はグローデインの右肩を軽く叩いた。

「ならば、絶対に大丈夫だ。僕と君の男前ならな」

総てはそんな些細なことで始まった――